



## 都市環境デザイン会議

東京都文京区本郷2-35-10  
本郷瀬川ビル 〒113-0033  
TELEPHONE 03-3812-6664  
FACSIMILE 03-3812-6828

# JUDI

## 069

20.NOVEMBER  
2002

特集  
観光のデザインー沖縄

発行者:都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

### ●特集: 観光のデザインー沖縄

1. 観光地の観光から都市観光、生活観光へ	1
2. 座談会	2
3. 沖縄・フォトスケッチ	4
4. アジアの中の沖縄	6
5. 那覇市の観光資源	8
6. 観光・リゾート地の照明	10
7. 琉球ブロックの立ち上げを画策中	12
●ブロック例会レポート	14
●事務局より	16
●編集後記	16

### 特集

## 観光のデザイン ～観光地の観光から都 市観光、生活観光へ～

土田 旭

AKIRA TSUCHIDA  
(株)都市環境研究所

## 観光のデザインー沖縄

沖縄を都市環境デザインの対象としてどこまでみていたかは筆者自身心もとない。あらためて都市環境デザインにおける地域性、風土性をいうとき、沖縄は格段に特徴をもっているばかりか、戦後の占領時代から継続する米軍基地の存在等がもたらす風景の特異性は突出している。こうした中で沖縄の観光に焦点をあて景観と環境デザインを考えてみることにした。

沖縄の経済は観光と基地と建設の三つが三分の一づつで成り立っているといわれる。しかしながら将来の地域発展を考えれば、地域の立地と独自性を生かした観光や交流あるいはその発展形の一つとしての知識型産業などをより強化していくことが必要と思われる。

ところで、「観光」あるいは「観光デザイン」というテーマであらためて沖縄を見るとき、わが国の多くの観光地、観光都市が陥っている傾向が、より拡大されて目に映する。というのも、観光の全般的傾向は、団体による観光から小グループあるいは家族主体の観光へと移行しつつあり、これまでの観光行動や観光地の受け入れとギャップが目だってきている。沖縄ではとくに空の旅と限られた大型の観光拠点、そしてプライベートビーチをもつ大型ホテルの組合せに象徴される古い観光形態が構造化されているのではないかと思われる。これらの後ろには巨大な本土資本の姿があり、地域の生活、文化と乖離している。人びとの観光体験、ことに海外旅行等の積み重ねのなかで、世代を問わず人びとの目は肥えてきており、うわべだけを飾ったり、上げ底型の観光地は敬遠される傾向に

ある。沖縄に惹かれる若者たちも観光拠点を避けて、リピーターともなれば、直ぐに離島へ向うようだ。もちろん大型リゾート施設も海外に比して遜色ないものがあるが、費用面で敬遠されている。

あらためて観光のデザインとはどういうことか考えてみると、当然一つ目に、地域や場所のごく一般的な意味での観光対象がある。歴史的建造物や史跡、名所、風光明媚な景勝地などであるが、大切なのはこれらが周辺地域を含めた環境の中に存在するということであろう。気候も大きな要素となる。

二つ目には非日常空間の演出、デザインがある。ハレの場の演出、まつりの演出などがあるが、これは日常空間のたたずまいとの対比、あるいは融合が課題になる。

三つ目には特異性の強調デザインがあり、風土性のデザイン、本物指向のデザイン、異文化侵入への対応等がある。全国どこへ行っても同じ幟や看板、特産物などの画一性からの脱却である。この中には、伝来の特産や、伝統的な食材と調理法による食べ物や料理、そしてそれにもまして、魅力ある人びとの存在、いわゆる名物の存在も含まれる。

これらをひっくりめでより魅力的な観光は、生活観光といわれるものである。離島は離島としてあるがままの姿に人びとは魅かれる。沖縄本島においてはどうか、生活観光としての潜在力は十分にあるように思う。諸外国や本土でもいわれるようになった都市観光の素地や資源もある。それではそのような場づくりをどうすればよいか。都市環境デザインの立場からどのような貢献がなしうるだろうか。

## 座談会

櫻井 淳

JUN SAKURAI

（株）櫻井淳計画工房

出席者

●沖縄側

伊禮廣行

／広那覇市 都市デザイン室

川嶋久枝／アトリエ首里

中本清／琉信（株）

福田俊次

／（株）国建・建築設計部

福島清、照屋勝秀

／（株）国建・地域計画部

前原信達、平良美穂子

／（株）都市科学政策研究所

仲尾覚、比嘉文枝

／プロジェクトコア

翁長秀正、石嶺一

／（株）沖縄計画機構

以上12名

●JUDI側

土田旭、近田玲子、吉田慎悟、

櫻井淳

以上4名

・場所：

沖縄県那覇市（株）国建会議室

・日時：2002年10月5日

## ■都市デザイン会議 in 沖縄の主旨

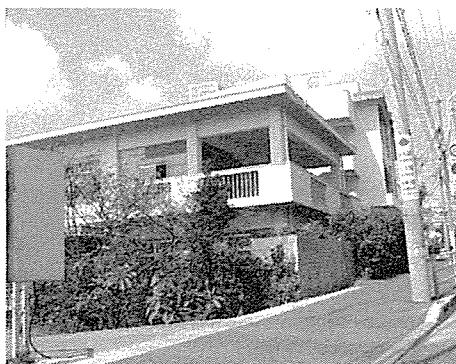
都市デザイン会議は全国組織でありながら、沖縄に会員が皆無なのは問題ではないか、と言う認識があった。その認識をもとに、今回沖縄訪問をし、沖縄の都市環境デザインに関連する人々に集まって頂き、宣伝広報を兼ねて、議論をしようと企画した。編集会議の中で、そのテーマとして、沖縄の地域性や風土的特異性を踏まえて、「観光のデザイン」を挙げ、それを通して、都市環境デザインの今後のあり方について考えることを基本的主旨とした。土田旭氏から最初に提案説明（前ページの巻頭言）がされ、沖縄の観光のデザインを通して、様々な視点で議論された。なお、沖縄側の人選は（株）国建の福島氏にお願いした。以下議論の概要のまとめは、偏見を含めて櫻井が行なった。



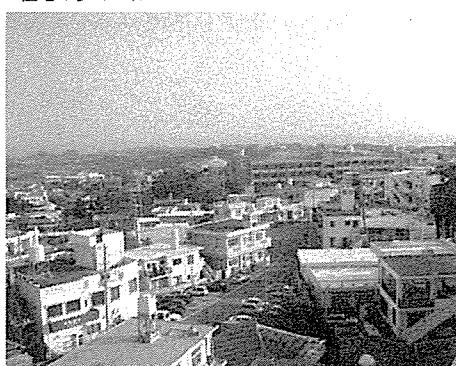
・首里城からの景観 緑と赤い瓦屋根



・視覚をさえぎり、風を通す花ブロック



・住宅の多くに付いているバルコニー



・陸屋根が沖縄の住宅の主流(金武町)



・北谷のショッピングセンター

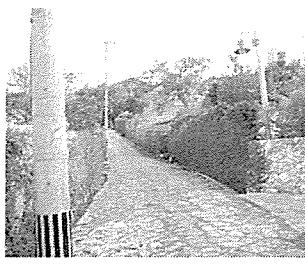
## ■沖縄における都市デザインの課題

(沖縄側から自己紹介を含めて出された)

- ・中心市街地の衰退－日本全国と同じような状態、那覇の中心市街地。
  - ・特に国際通り（那覇市の1.6kmのメインストリート）が衰退している、観光客だけの通り、生活の延長上の日常的賑わいをどうつくるか。
  - ・観光産業の構造的課題－これまでの団体観光の衰退、グループ観光へ・伝統建築物や離島の文化。
  - ・景観条例と地域特性－歴史風土を活かしたまちづくりをどうするか。
  - ・リゾートの環境や沖縄の色彩の問題。
- [以下プロジェクトの写真（JUDI側が取った）を見ながらの議論]

## ■沖縄の色彩について

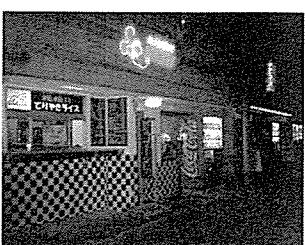
- ・沖縄全体は明るい色が多い。基調は白い壁が青い空にあって、白い中に赤い瓦の色がぽつぽつあるのが美しい、さらに緑が調和している。金属的な東京的色はやめた方が良い。（吉田）
  - ・コンクリート色や瓦だけではないだろう、強烈な色彩があるはずだ。（土田）
  - ・着物の色等の鮮烈な色があり、メキシコ、インドネシアに近いのでは。（福田）
  - ・目立たない色を行政が求めているのか、最近鮮烈な色がなくなってきた。（平良）
  - ・沖縄の色は何か、気候との関連、自然の材料の色が良い時間がたつほうが良い。（福田）
  - ・一方で、ペンキペタペタは良いのでは、社交街のサインと通ずるもの。（吉田・櫻井）
- 何故ラーメン構造と陸屋根の創る景観
- ・何故フラットルーフになってしまったのか。（昔は瓦屋根）（櫻井）



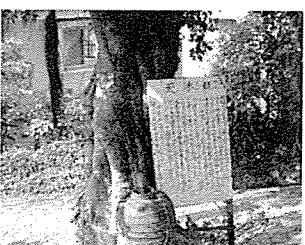
・伝建地区の電柱



・社交街のゲート



・社交街のネオン



・昔から沖縄は天水を利用



・琉球村



・琉球村



・琉球村

- ・増築を想定していた。フラットルーフに角が生えている。(福田)
- ・フラットルーフは台風に不利、ラーメン構造は米軍建築技術の影響。
- ・フラットルーフは米軍が採用、天井懐にねずみが住めないので、衛生面から。(石嶺)
- ・かつては防水をしなかった、非常に安価。(福島)

- ・水タンクを設置する必要がありメンテナンスの関係上フラットルーフが有利。

#### ■特徴的穴あき手摺つきバルコニー

- ・沖縄で良く見られる住宅の景観、沖縄ならではの景観。

- ・穴あき手摺は「花ブロック」と言う、視覚をさえぎり、風を通す。(福田)

- ・デザインボキャブラリーとして「花ブロック」は使える、インドネシアの影響、今流行っていない。(土田ほか)

- ・バルコニーはかつて面積参入されず、増築可能スペースとして取られた面も。(福田・中本)

#### ■プライベートビーチと離島

- ・プライベートビーチ管理された人工砂浜。

- ・ホテル側の責任になるので自由にさせない。(団体観光)

- ・ビーチ間競争、施設の充実。

- ・囲われた自然と離島の自然との対比。

- ・地域の生活文化と一体化した沖縄の生活観光。

#### ■観光地としての沖縄

- ・観光の期待に対し、驚きが不足している。(近田)

- ・期待に対して首里城の役割は大きい、その赤がシンボルではないか。

- ・色彩を含めて、エネルギーの出し方が見えない。

- ・音、味、イベント、風景の沖縄らしい強烈さが見えない。光と影の驚きが必要。

- ・琉球村(テーマパーク)は敷地を広く取るべき、建築的説明があっても良い。

- ・中に上がりたかった、観光の雰囲気だけで、生活観光として物足りない。(櫻井・近田)

- ・風景を活かすようなものがいるのでは。

- ・デザインの良いガイドマップが必要ではないか、もって帰りたくなるものが必要では、今までマップが必要では無かった。(団体旅行型)(櫻井)

#### ■バス停のデザイン

- ・パブリックデザインとして様々な形や色があって楽しい。(近田)

- ・サミットの時に各自治体で様々なものが出た。

- ・コミュニティでデザインを決めたらしい。

- ・金武町のバス停、小学生が書きめた。

- ・強烈な色は周辺の緑とあってる。

- ・集めてパブリックデザインのあり方論として特集を。

#### ■社交街の景観

- ・基地前の繁華街を社交街と言う。この景観が特異な景観を持つ。

- ・社交街の再整備(金武町)、広場の使い方、

- ・アメリカ文化の窓口として機能、近年は日本人が客として。

- ・ウォールペインティング、不思議なグラフィック。(吉田)

- ・書割の街(ベンチューリのラスペガス的)、もっとケバケバしたネオンサイン。(櫻井)

#### ■環境共生型のまちづくり

- ・沖縄の水は硬水で、天水の利用が盛んであった。(福田)

- ・環境共生型の住まいは沖縄の伝統的。

#### ■那覇市の景観

- ・観光立県として那覇空港から沖縄らしい景観の展開が必要ではないか。(福田)

- ・那覇は大都会であると言う感想、例えばシンガポールのような景観にできるか。(土田)

- ・モノレールが完成するが、このシークエンス景観は観光客にとって重要。(櫻井)

- ・景観地区の指定を考える。首里城からの景観、緑色の屋根が見える。(吉田)

- ・北京の例で、見られる建物のリストを作成し、景観阻害要素をつくる。(土田)

- ・伝統建築物の地区の電柱は木柱にすることか。

- ・中心市街地のアーケードは既存不適格かもしれないが、様々な形があり、デザイン的に面白い、中心市街地活性化と連動できないか。(櫻井)

#### ■街路樹が特徴的である、沖縄的景観とは

- ・街路樹の種類があまり見えない。(土田)

- ・沖縄の景観は緑の光と影が印象的であった。(中本)

- ・屋上緑化や垂直緑化が沖縄で重要ではないか。緑をうまく使えないか、白と原色ではつらい。(土田)

#### ■北谷のショッピングセンター

- ・日本全国どこにでもある空間。

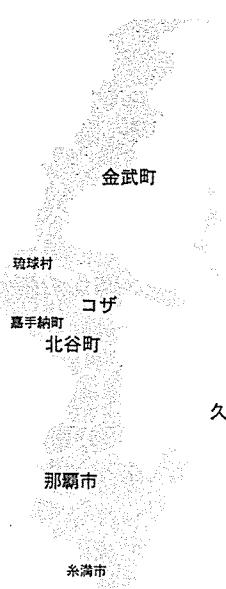
- ・逆説的には、基地には無い新しいアメリカ的風景か。

## 沖縄・フォトスケッチ

吉田 慎悟

SHINGO YOSHIDA

カラリスト



今回の取材では、本州では見かけない様々な沖縄の景色に出会いました。

仕事柄、沖縄らしい色に惹かれ、色再現のよいカラースライドで撮影しましたが、今回は予算の関係でモノクロ印刷となりました。

沖縄は戦争によって多くのものを失いましたが、復興したまち並みには多くの沖縄らしい色を見る事ができました。



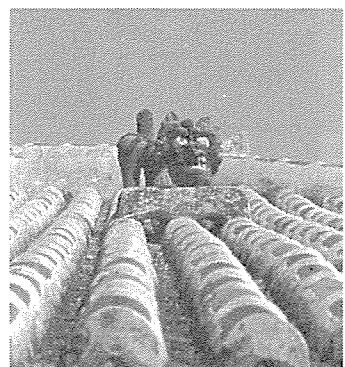
1.白いフラットルーフの建物が拡がる首里城から見た那覇のまち並み。赤茶色の煉瓦タイルの建築物も多少混在しているが、全体的には高明度の外壁が多い。



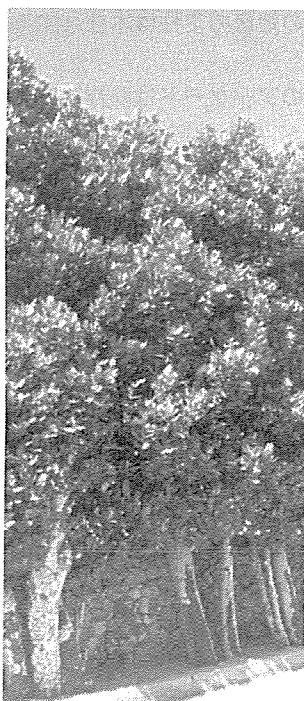
2.金武町の役場からの眺望。ここも白いフラットルーフの建物が多い。赤い瓦を漆喰で固めた伝統的な屋根は金武町でもほとんど見ることができない。



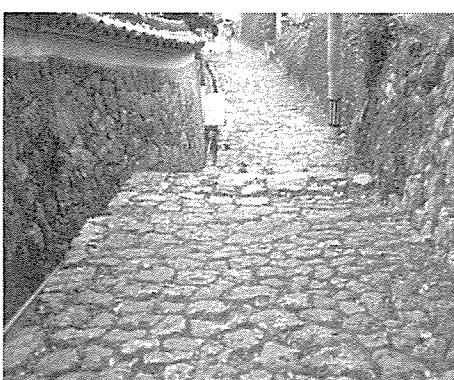
3.琉球村にある赤い瓦と白い漆喰の屋根を持つ民家。ここでは沖縄民謡を楽しむことができた。沖縄独特の開放的な表情を持つ民家を本島で見ることは少なくなってしまった。



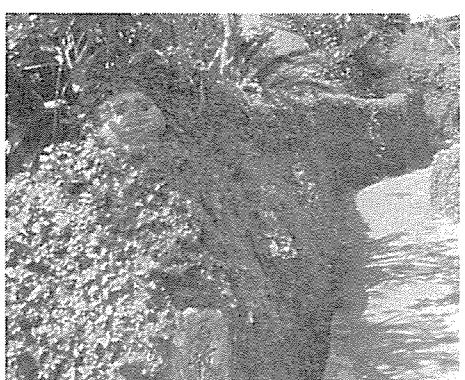
4.沖縄で赤い瓦屋根の上によく見かける魔よけのシーサーは、ユーモラスな表情で屋根の上からにらみをきかせている。



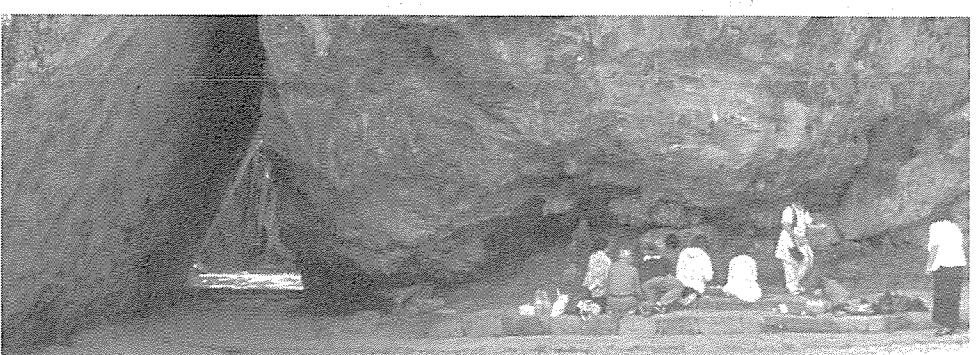
7.沖縄は本州では見られないような樹木によく出会う。久高島では明るい琉球石灰岩の石垣と濃い緑のフクギで囲まれた家並みが見られる。



5.「日本の道百選」にも選ばれている金城町の石畳道。明るい琉球石灰岩の石畳は緑に覆われていて落ち着いた表情を持っている。



6.壺屋の小道で見かけた石敢當(いしかんとう)。この魔よけの護符は沖縄を歩いているとよく出会う。ここも生け垣のように家に巡らされた壠は緑で覆わされていた。



8.正面に神の島・久高島を望む位置にある琉球一の霊地である斎場御獄(セーファーウタキ)は、うっそうとした木々に囲まれた神秘的な雰囲気の中にあった。



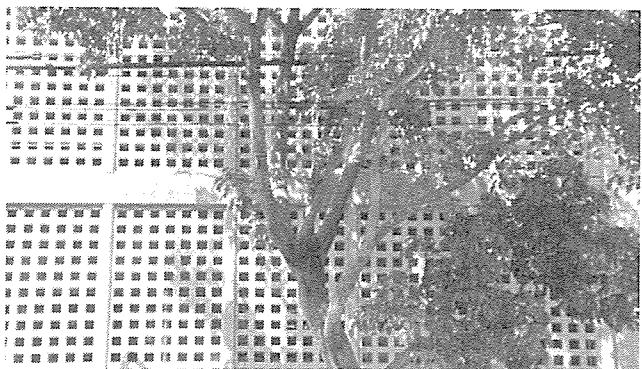
9.名護の市庁舎は周囲の緑と共に育ったような落ち着きがあったが、後から取り付けられた空調の室外機や自動販売機が、その落ち着きのある見え方を阻害していた。



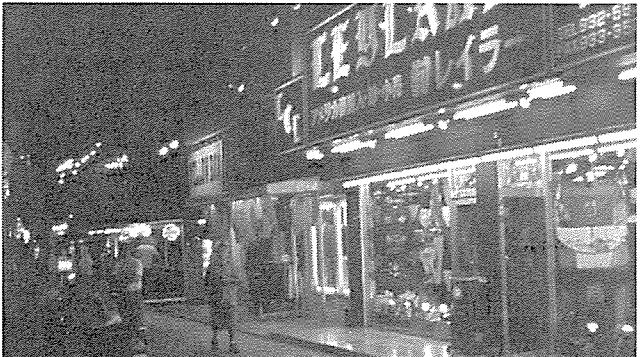
11.沖縄の米軍基地の近くには社交街と呼ばれる歓楽街がある。金武町の社交街はやや寂れていたが、市民参加で増やしているという色鮮やかなグラフィックアートが店舗を飾っていた。



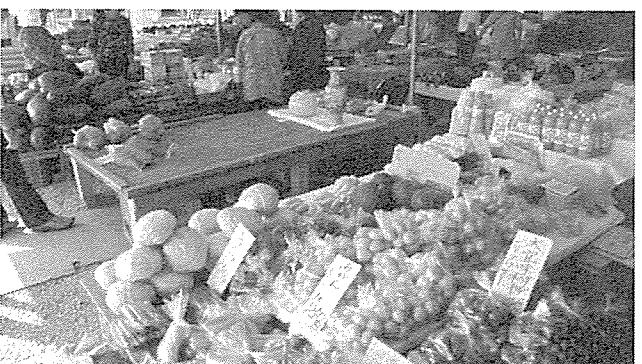
13.北谷町のショッピング&アミューズメント施設・アメリカンビレッジは大きな集客力がある。海辺の広大な敷地にパームツリーなどを植えて、アメリカらしさを演出している。



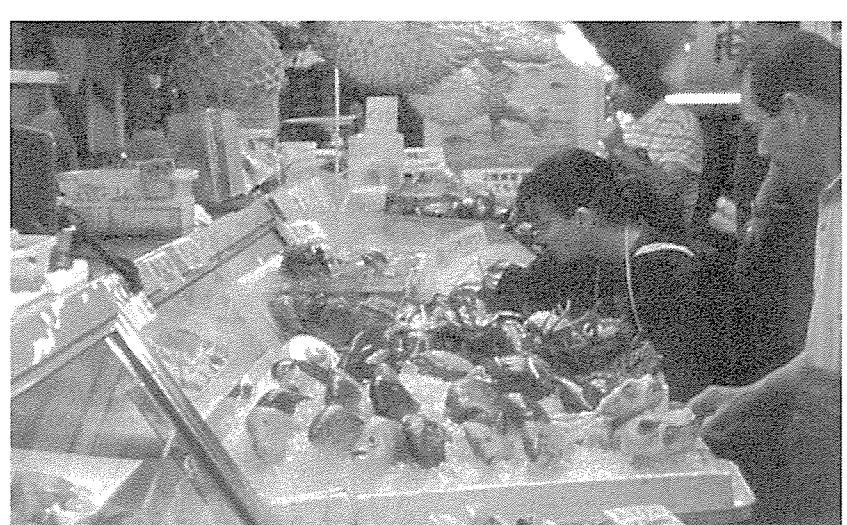
10.花ブロックと呼ばれる穴を開いたブロックは、新しい中高層建築物に沖縄らしい雰囲気を与えていた。この花ブロックの穴には正方形や花形など、様々なヴァリエーションがあった。



12.嘉手納基地の近くは、多くの商店が並び夜も賑わっていた。看板は英文字が多く日本にいることを忘れさせる不思議な雰囲気を持っていた。



14.国道沿いにあった金武町の市場。最近多く見かけるちょっとおしゃれな「道の駅」らしくならないように気をつけて、適度な猥雑感を演出しているという。



15.(左)軽快な鋼材で組まれたアーケードを持つ牧志の公設市場。テント幕から漏れる光の下には小さな様々な店舗が並び賑わっていた。ここには戦後の闇市の雰囲気が今も残っている。

16.(上)赤や青や黄の原色の魚が並ぶ牧志公設市場の鮮魚店。東京の魚屋では見かけない色鮮やかな魚には驚かされたが、原色の魚のディスプレイにも沖縄らしさが感じられる。

## アジアの中の沖縄

中本 清

KIYOSHI NAKAMOTO

株琉信

※は世界遺産

## ■アジア大陸に最初の第1歩

35年ほども前の事だ。リュックを担いで韓国の釜山港に上陸した。下関から一晩の船旅だった。陸に足が付いたとたん何だか分からぬが、足がガタガタ震えた。「ここはアジア大陸なのだ、半島なのだ。この地ははるかパリ・ローマにつながっている」と一人で感動した覚えがある。「島育ち」の私は当時、米国民政府の統治下にある沖縄から名古屋大学への国費留学生という身分だった。だから、米国民政府発行の身分証明書と日本国外務省発行のパスポートを両方所持していた。入国管理でややこしい説明して、やっと韓国に入った。その後数週間、韓国の古寺名刹をめぐる旅をした。もちろん京都・奈良の古寺巡礼は大好きだし、木造建築・木造美術にのめり込んでいた。そしていつも思ったのは、わが故郷の首里城を頂点とする木造建造物がすべて焼き尽くされ、かすかにセピア色の中に残された乏しいイメージ。日本建築史から忘れ去られてしまった旧国宝建造物群。運命のめぐり合わせと言うべきか、その時から20年後に、復元事業に携わることになってしまった。最近韓国へはよく行く機会があるが、釜山港の足の震えは今でもよく覚えている。

## ■エイジアン・スピリッツ

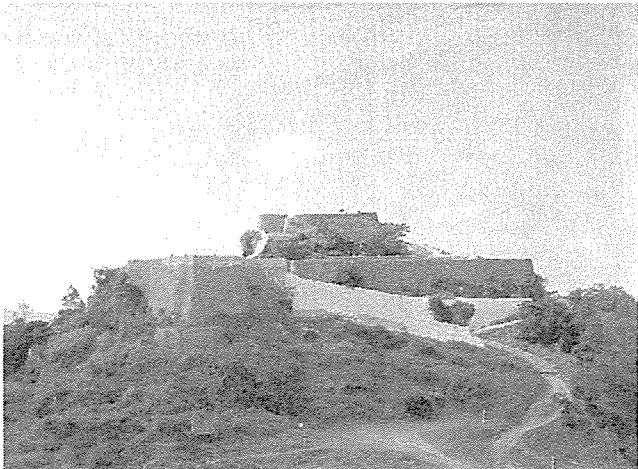
22年前、北アフリカのリビヤの商業都市ベンガジに居た。国際入札で落札した日本側コンソーシアムの建築部門のスタッフとして約1年間勤務した。現場はサハラ沙漠を南へ500キロの奥深い場所。人の住めない所だが、オイルがある。ここに西部劇に出てくるような町を作った。オイルの出る期間だけ、住めればよい仮設の町。200人が暮らす。これをタイ国からリクルートしてきた労働者たちと立ち上げた。苦しくて寂しくて…、運命共同体だった。工事が終わって、彼らを送り出す朝、いつも涙が止まらなかった。お互い言葉はまったく通じないが、抱き合っておおい泣いた。日本へ帰国の途中、パンコックに立ち寄った。空港には彼らがわざわざ田舎から出迎えに来ていた。立っているだけで汗ばむほどの湿度の中で、両手をそろえて「サワディカッ普」。笑顔と礼儀正しさが印象に残っている。お互いDNAの琴線にふれるような共通体験。これがエイジアン・スピリッツなのか？

## ■日本のアジア:沖縄

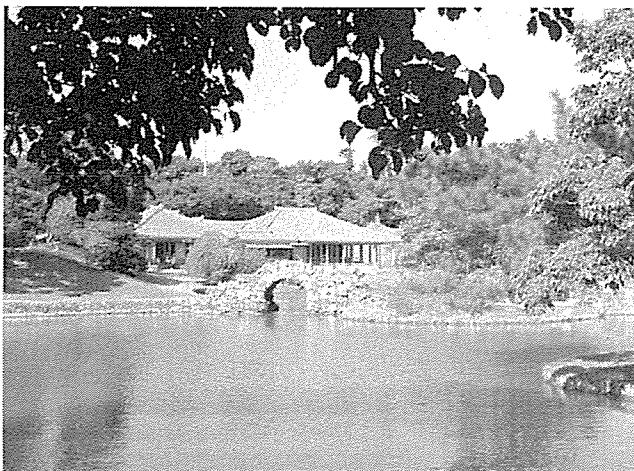
沖縄が日本に復帰して今年で30年目。いろいろな経緯があったが、平和的な外交交渉



・王国の象徴首里城正殿 ※



・勝連城 ※



・首里王府の別邸識名園 ※



・韓国海印寺の蔵経を納めていた弁財天堂

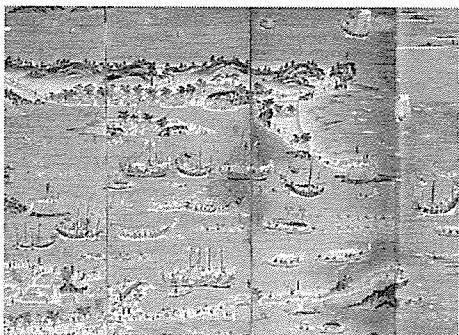
で日本は再び沖縄を手に入れた。当時の総理大臣はこの外交手腕でノーベル賞を得た。復帰特別措置により多くの社会资本が整備された。生活は便利になったが、町並みが平凡になった。しかし、日本で唯一亜熱帯気候に属する島々で暮らす、生活のユニークさはまだまだ魅力的に見える。高度経済成長を享受(?)出来なかった1周遅れのランナーは、気がつけば前を走っていたということもあり得る。音楽、プロスポーツ、芸能やゴルフなどで今、沖縄の若者が元気だ。失業率が高いというのに、移住してくる若者が絶えない。この30年間で人口は40万人も増えた。こんな地方都市は他にない。アジア圏からの研修生は沖縄が大好きと言う。東京の研修では得られない日本の良さがあると言う。食べ物、気候、人の笑顔が同じで、犬の歩き方まで似ているらしい。

### ■混沌と秩序の変貌するアジアと沖縄のミックス文化

昨年、上海近郊の都市で行われた国際都市デザインコンペで、幸い優勝した。これは多くの先輩や友人たちの励ましや協力や惜しみないアドバイスがあったからだ。台湾の設計グループの協力も有り難かった。上海

や近郊都市の発展のダイナミックさは想像を越えたものがある。中国の友人たちに聞けば、デザインコードはない、あるのは混沌とした多様性のみ、必要に応じてルールを決めるらしい。沖縄にチャンプルーという料理がある。インドネシア語が語源。いろいろな食材をまぜこじやにしつつも、全体でバランスを取っている。個々に好き嫌いがある人でも、これだと食べることが出来、健康にも良い。

私の個人的なアジア初体験から、すでに多くの年月が過ぎ去った。しかし、沖縄という地で暮らす生活は必然的にアジアとともににある。アジアの多様性を歴史の中から取捨選択してきたミックス文化は、また日本の宝でもある。沖縄だけではない日本の各地方都市にある多様な文化、これを認めることからアジアの一員としてスタートしようではないか？



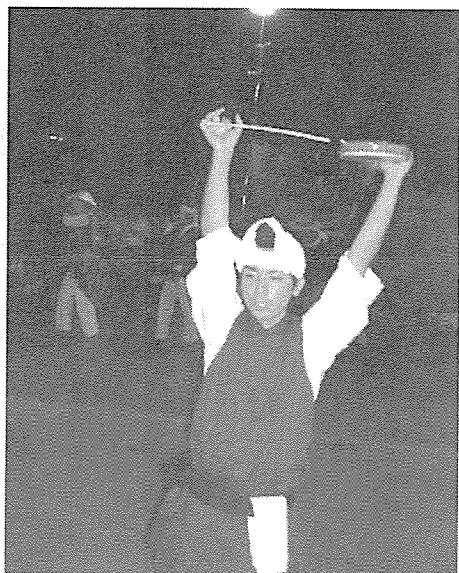
・海外交易が盛んな頃の那覇



・聖なる斎場御嶽 ※



・中城城 ※



・日本僧袋中が伝えたエイサー踊り

## 那霸市の観光資源

福島 清

KIYOSHI FUKUSHIMA  
株国建

東京から沖縄に転勤して、すでに17年半になる。首里城の復元設計や中国庭園の設計など自分の興味に合った仕事に携われることができたせいもあるが、やはり私には沖縄の風土が合っていたので、長い間沖縄で暮らすことができたのだろうと思っている。こうした仕事や生活を通じた体験の中から、改めて那霸市の観光資源というものを考えてみたい。

那霸市は沖縄県の県都であり、面積およそ39 km<sup>2</sup>に30万人ほどの人々が暮らす県内最大の都市である。近年は平成15年に開業が予定されている空港から首里までのモノレール施設によって、都会としての風貌を一段と増してきたように感じられる。また、昭和62年に米軍基地が返還された新都心地区の施設立地が急速に進展し、新たな中心地形成へと拍車がかかっている。こうした

都市の近代化に対して昔ながらの景観喪失を惜しむ声もあるが、一方で今後それらをどのように沖縄風に取り込んでゆくのか、あるいは古いものとどのように対峙してゆくのかなど、楽しみな動きでもある。それは同時に、これから的新しい観光資源に繋がることが期待できる。

平成12年に沖縄の遺跡群が「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産に登録されたため、歴史文化的な観光資源の広がりや深みが増してきたことも大きな変化である。登録された遺産群9ヶ所の内、那霸市にはその中核である首里城跡、そして園比屋武御嶽石門、玉陵、識名園の4ヶ所が集中している。観光というものがその土地のもつ歴史や風土に触れ、そこから改めて自分を見つめ直すというある種の“自分探しの旅”だとするならば、沖縄の歴史文化はそ



・斎場御獄の中にある拝所のひとつ



・世界遺産の一つ勝連城の城壁

うした観光資源としての価値は高いと感じている。およそ450年間、首里城を拠点に東アジアを舞台に歩んできた琉球王国の歴史は、鎖国時代の内側ばかり向いていた日本をダイナミックに見つめ直す格好の機会を与えてくれる。また、王国時代に生まれ育った芸能や祭事、工芸などの文化は、その一つひとつが独特な輝きを放っているとともに、そこにアジア的な広がりを感じ取ることができる。世界遺産にも登録された園比屋武御嶽や斎場御嶽は沖縄の御嶽信仰を実践する場であり、アジアに共通するアニミズムを源とした信仰が現在でも人々に支えられて生きている。

そして最大の観光資源は、豊かな自然と独特的な文化に育まれて悠々と生きている人々の生活ではないだろうか。今、沖縄という地が持つ癒しの効能が注目されている。沖縄

の空港に降り立ったとたん、ほっとする開放感を味わった旅行者の話をよく聞く。温暖な気候、海や植物に囲まれた自然環境、ヘルシーな食文化などがそうした効果をもたらすと言われているが、ストレスを与えることが少ない人々の暮らしぶりがさらにその効果を倍加しているように思う。

那覇市の公設市場付近は沖縄の人々の生活と観光がクロスする魅力的な一帯である。衣料品から食べ物、日用品などがめずらしい品々が所狭しと並んでいる風景は、アジア諸国にある市場との共通性を色濃く残している。

こうした観光を過剰に意識しない沖縄らしい観光資源が、いつまでも生き続けることを願っている。



・生活と観光がクロスする市場周辺



・施設立地が進展する新都心地区

## 観光・リゾート地の照明

近田 玲子

REIKO CHIKADA

照明デザイナー

筆者が訪れた、沖縄中部の3つの街の夜間照明を紹介する。

## ■北谷町

活気のある新しいまち北谷(ちゃたん)町は、那覇から車で約30分の静かな住宅地の中に作られた、地元の人向けの郊外型ショッピングセンターである。

スマートなインテリアの映画館やレストラン、ゲームセンターに、那覇や近郊各地から若者が集まるばかりでなく、週末には家族連れや基地のアメリカ兵もショッピングに訪れる。

周辺の道路沿いには、アメリカ風ネオンの店とアジア的裸電球で飾られた屋台の店が自然発生的に増え、夜遅くまでにぎわう。かつての那覇国際通りのようなエネルギーを求めて、最近は県外からの観光客も多く訪れる。

写真1：遠くからもはっきりと見える観覧車のネオン。

写真2：数ヶ月前にアメリカ兵によるレイプ事件が起きた駐車場。事件後に投光器が増設され、隅々まで明るく照らされる様になった。人が沢山集まる所は明るくしようとする動きが各地で見られる。

## ■美浜(みはま)公園

北谷町に近い海岸沿いに作られた人工海浜公園。夏は県外からの海水浴客で賑わうが、普段はこの近くに住む人たちの散歩やジョギングコースとなっている。

夜に観光で訪れる人はほとんどいない。公園内の彫刻やオブジェのライトアップ、噴

水や池の水中照明などがされているが、周辺住民のための夜間の照明設備としては過剰に見える。

写真3：月明かりだけでも充分人の姿の見える海岸。

写真4：浜辺に置かれた船のライトアップ。

## ■首里城公園

沖縄の代表的な観光スポットである。首里城を中心とする守礼門や首里城公園、点在する歴史的建物の景観照明は、かつて筆者が手掛けたが、首里城の夜間開園がされていないことから、夜、ここを訪れる観光客は少ない。

首里城公園の照明は、歴史的景観保全の上から、全体の明るさを押さえる設計とした。久しぶりに公園を歩いてみたが、当初の設計にあった樹木照明などは取り外され、実験に使った足元灯だけがそのまま使われている様子だった。

文化財保護の観点から照明器具の設置や配管工事の難しさはあるが、県外からの観光客のみならず、地元の人が利用する公園としては、黒くうつそうと繁る木々の暗い印象を取り除くための、本格的な照明整備が必要と思う。

写真5：実験に使った足元灯がそのまま残されている歴史的な道。

写真6：首里城を一望できるのはこの場所だけであるが、ほとんど知られていない。車を止めてゆっくりと鑑賞できるスペースの確保と、夜の観光スポットとしての整備が望まれる。



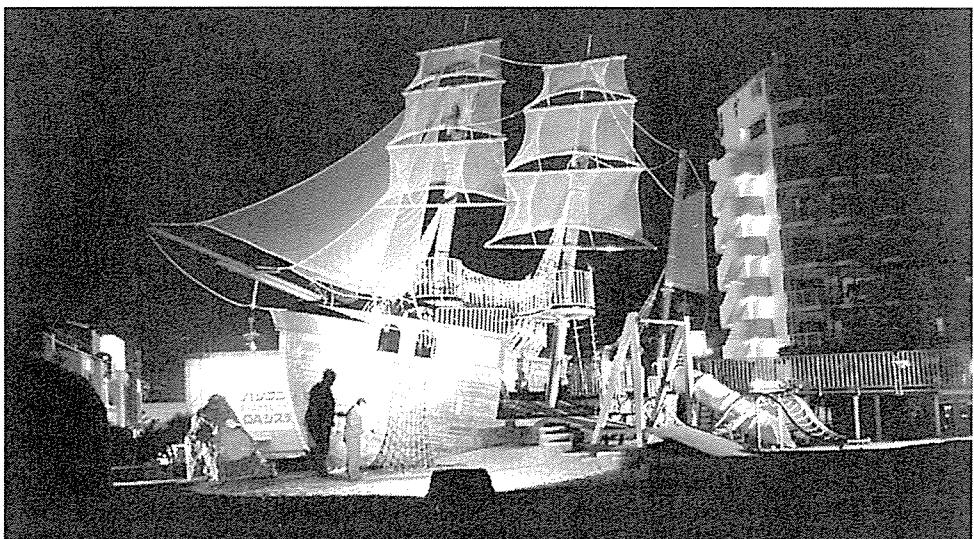
写真1



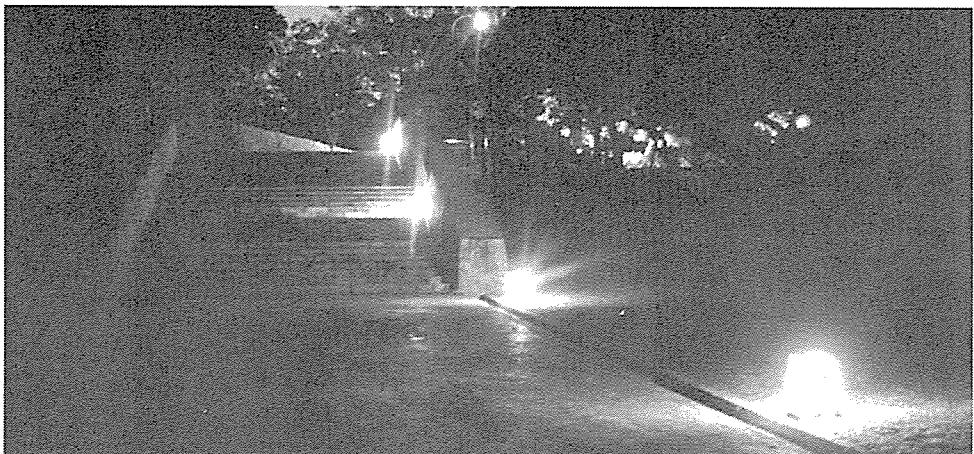
・写真2



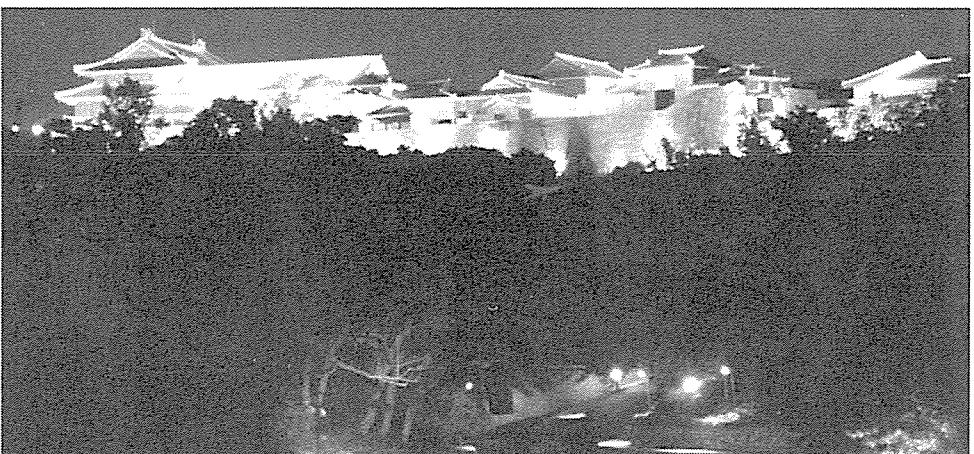
・写真3



・写真4



・写真5



・写真6

## 琉球ブロックの立ち上げを画策中

石嶺 一

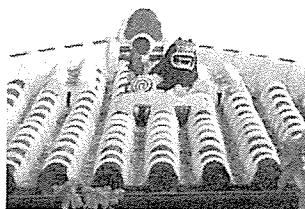
HAJIME ISHIMINE  
株沖縄計画機構



・首里城と龍たん(池)を望む



・首里の石疊道



・赤瓦とシーサー

### ■都市環境デザイン会議が沖縄にやって来た

2002年は記念すべき年となった。サッカーワ杯が韓国と日本で開催され、日本は決勝トーナメント進出を果たした。我が沖縄にとって、日本復帰30周年の年である。そして、都市環境デザイン会議の特使が琉球進出を果たした年でもある。ペリー提督率いる黒船が浦賀に現れる前に琉球を訪れたのが1853年であるから、1.5世紀が経過してからのことである。

JUDIの一一行は、櫻井淳、近田玲子、土田旭、吉田慎悟の各氏で、いかにも何かしら雰囲気のある、この南方の島には極めて少数派に属する個性的風貌を有する面々である。迎え撃つ琉球サイドは、私を含め丁度1ダース。初対面である私にとっては、これからいったい何が始まるのだろうかという不安と期待で心が乱れるというより、何か面白い事がこれから起こるのではという直感が働いていた。やや重たい空気が室内をゆっくり流れている。私は、三線の音色に乗って島唄が遠くに聞こえる錯覚に囚われていた。しばらくの沈黙のあと、先陣を切って近田氏がJUDI一行の琉球訪問の趣旨を語り始めた。

### ■沖縄の都市環境デザインの行方

「緑滴る街並み、見晴らしの良い丘、こんもりと繁る木立、どれを取り上げても首里の都は世界一美しい。土官たちは首里に登るといつも無上の喜びにひたる。手入れの行き届いた泉でのどの渴きをいやし、雲つく大樹の陰でピクニック気分。その気になれば昼寝だって楽しめる。昼のうたた寝が終わると鬱蒼とした樹木に囲まれた泉で水浴びを楽しむ。ここがアメリカならいいだけの価値があるやら見当もつかぬ。あの伝統の国イギリスでさえ、こんな古色蒼然たる自然の庭園は持ち合っていないのだ。」これは、1853年のスボールディング(ペリー艦隊・軍艦ミシシッピー号の書記)航海記に記されている当時の琉球の都である首里一帯を表現したものである。

しかし、その美しかった都その他は、沖縄戦で全て灰燼となってしまった。残っていれば、京都や奈良に劣ることなくすばらしい観光名所となつたであろう歴史的建造物や文化財のほとんどが消失したのである。もちろん多くの命も…。

都の再建は、戦後しばらくして米軍政府統治のもと、大部分の土地を米軍基地として接収されながら無の状態から始まった。産業復興の名目で陶業関係者の一団が先遣隊

として壺屋地区に入域したのが市街地復建の始まりであった。その後徐々に市街地の形成が許されるが、従前の宅地ではない低湿地帯や農地等で、また都市計画がない状態であったため、自然発生的に市街地のコアが形成されその一部が現在に至っている。住宅は建材がないため、収容所で使用されたテントや米国から持ち込まれたツーバイフォー等が使用された。一方、住宅や土地を失った人々の多くは基地産業に職を求め従事する。米軍基地建設の過程で修得した技術は、やがてラーメン構造・陸屋根の画一的なデザイン指向を持つ住宅へと受け継がれ、戦後、無から立ち上がった県民生活の重建へと広がり、一種独特の都市景観の形成へと繋がって行く。また、浦添市やコザ市(現沖縄市)等は、米軍基地の門前町として、横文字のサインが溢れるアメリカンな景観を持つサービス業の町となって行った。

1972年に沖縄は、日本復帰(沖縄では一般に本土復帰と言う)を果たし、琉球政府から沖縄県となった。本土と同様の法体系と事業体系のもと、本土の水準に近づけようと公的事業が次々投入され、道路や宅地整備に限らず、港湾整備や農地整備等が沖縄県の発展を急激に押し上げ、物質的には豊かになった。現在も続く経済発展に重きを置いた開発の波は、戦争後米軍統治下の27年間とそれ以前の琉球の時代をランダムに混ぜ合わせながら、良くも悪く多くのモノを生み出して行った。バブル経済の崩壊は、遅きに失した観もあるが無秩序なりゾート開発等に歯止めをかけ、沖縄の貴重な自然環境資源の消失を遅らせた。都市形成の分野にあっても環境共生型の指向がグローバルな流れをつくり、地方分権の流れは、地域らしさを發揮し、形成する機会をもたらしている。一方、米軍基地のプレゼンスを切り札に、沖縄と日本政府とのやり取りは日本復帰30年を経過してもまだ続く。イデオロギーをこの場に持ち込むつもりはない。しかし、無視も出来ない現状がそこにはある。基地経済と公共事業が沖縄の産業を支えている事実があるからだ。観光立県として自立的発展を目指そうとする施策の方向性は徐々に市民権を得てきたと思う。昨今の沖縄ブームは、古くからの文化やライフスタイルなどにスポットをあて、島唄や泡盛、ゴーヤー、琉球方言に至までメジャーにした。同時に、沖縄の人々に自分たちしさみたいなものを自覚させ、多くの人々が持っていた本土に対するコンプレックスをもぬぐい去らせようとしている。都市環境のデザインについても種々の取り組みがなされ

てはいる。その有効性に関する議論を避けるが、県をはじめいくつかの市町村は景観形成条例や屋外広告物条例等をつくり運用している。県内の建築家や都市計画家、官と学によるその分野への取り組みも多くなってきた。しかし、まだしっかりとした流れを創り得ないと感じるのは私だけではないだろう。何かきっかけを得て、県内の多くの人材参加、新たな刺激や外部の協力を得てその流れを大きく強くする必要があるのだ。

#### ■JUDI・琉球ブロックの立ち上げ

JUDIが琉球へ派遣した特使らによるプレゼンテーションと意見・提案を受け、フランクな議論が約3時間は続いただろうか。辺りは暗くなり始め、一同は共通に喉の乾きを覚え

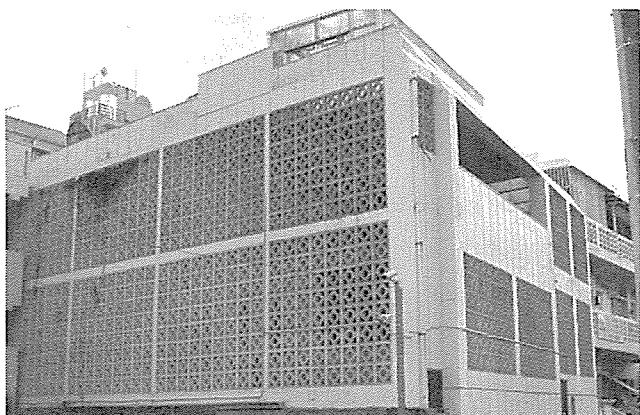
ていた。冷たいオリオンビールと郷土料理、泡盛の古酒が楽しめる那覇市内のとあるスペースへ議論の場を移し、「さて、沖縄の都市環境デザインをどうするか?」という肴を加え、やっと本音で議論が進行していった。やがて、大琉球時代に交易で栄え培われた王国民の遺伝子の中にある歓待術情報を受け継ぐ沖縄サイドのメンバーたちのトーンが上がり始めた。私の当てにならない直感の一部がスパークし始めた。(…紙面の都合で貴重かつ濃い議論の中身をやむを得ず中略)

結論、JUDI沖縄ブロックを立ち上げて、沖縄にあっても今後いっそう都市環境デザインの重要さについて広く社会の認識を高め、これらを通じてより質の高い都市環境が実現されるよう活動を展開しようということになった。そこで、私はある表現にこだわった、沖縄ブロックではなくあえて「琉球ブロック」という名称を前提にその立ち上げに取り組みたいと。ウチナーンチュー(沖縄の人)はおおかた熱しやすく冷めやすい、その最たる者が私だ。その性格を反省・矯正しつつ、2002年10月5日の会議で確認された内容の早期実現に向け、この紙面を借りて宣言文とし、私の2003年が始まる。

都市環境デザインの会員の皆様、今後ますますのご支援ご鞭撻をお願い申し上げます。



・那覇新都心の住宅地区



・花ブロックの住宅



・基地の街、コザ(沖縄市)



・米軍基地跡地利用(北谷町)



・国道58号のロードサイド

## ブロック例会レポート

### ■北陸ブロック

森 俊偉

MORI TOSHIHIDE

北陸ブロック幹事

金沢工業大学

日本建築学会の大会が夏に金沢工業大学で開催されたこともあり、北陸ブロック総会は11月に開かれました。忙しい時期であるにもかかわらず、15名が参加。総会に引き続き、8名による日ごろの活動事例の発表が行われました。

発表は、まちづくりにおけるソフト面の考察（まちづくりと経済再生）／住民主体のまちづくり活動／PI（パブリック・インボルブメント）による道路計画の実践／区画整理にみる用水の位置づけに対する問題提起／環境システムサイン計画／金沢のまちなか活性化策としてのポケットパーク整備／富山市中心街の再開発事業／大学キャンパス計画の変遷と様相／新潟における河川を軸としたまちづくりの様相と、多岐にわたる内容でした。

翌日の視察会では、「近年の金沢市街地の景観形成の状況を探る」と題して金沢城公園（旧金沢城址）、金沢市立21世紀美術館建設地、移転が決まっている石川県庁界隈（平成15年1月移転）を起点とし、用水整備と武家屋敷周辺の景観修景の現状、そして室生犀星記念館が完成したことにより景観修景が進む犀川沿い界隈を視察しました。

大河ドラマの放映により関心が高まっていた時期に、平成の金沢の都市環境を探るという主旨でしたが、残念ながら冷雨に祟られての視察となりました。

その他、各県ごとの活動として、新潟でシンポジウムの共催が今年に入って行われました。以下に、それぞれの活動の概要を示します。

### 1. ブロック総会および発表会：

(金沢工大にて、2002年11月9日  
(土)、10日(日))

参加者 会員11名 会員外4名

○11月9日(土)

・総会

・各会員等による発表 発表者 8名

○11月10日(日)

・視察会

テーマ：近年の金沢市街地景観形成状況

を探る 参加者 6名

視察ルート：金沢城公園周辺から武家屋敷、犀川界隈（室生犀星記念館まで）

### 2. 各県ごとの活動：

○JUDI 新潟、都市のあかりをテーマにしたシンポジウムを共催

(新潟市内にて、2月8日(土))

・主内容：対談、面出薰&樋口忠彦  
にいがた寺町からの会の活動報告、等

### 3. その他の活動：

○ガイドブック編集委員による最終会議  
(金沢市内にて、12月21日(土))

## ■関西ブロック

堀口浩司

HORIGUCHI KOUJI

関西ブロック幹事

㈱地域計画建築研究所

関西ブロックの総会を12月21日(土)

中央電気倶楽部(大阪市北区)にて開催し、

2003年の活動方針が下記のように決定されました。

### 1. 活動内容(2003年1月~12月)

#### (1) 都市環境デザインセミナーの開催

年間10回程度開催する。

#### (2) 都市環境デザインフォーラムの開催

第11回都市環境デザインフォーラム・関西を開催する。

#### (3) 道頓堀プロジェクトパネル展

現在、大阪市から依頼を受け関西ブロックの有志メンバーにて、道頓堀川のデザインプロジェクトを行っている。この活動成果を広く報告する。関西ブロックのフォーラムと同時期に開催する予定。

(担当 横山あおい)

#### (4) 海外交流セミナー

韓国(大邱)にて現地視察と研究者・実務者との交流を図る。(担当 小浦久子、鳴海邦穂、丸茂弘幸)

#### (5) JUDI関西NPO法人検討委員会

JUDI関西の新たな活動についての実現性をNPO法人検討委員会にて検討する。

### 2. 活動体制

#### (1) ブロック幹事 堀口浩司

#### (2) 運営委員長 堤 肇

会計担当 斎藤治夫

#### (3) ブロック事務局 ㈱ヘッズ

#### (4) セミナー委員長 鳴海邦穂

#### (5) フォーラム委員長 角野幸博

#### (6) 海外交流セミナー委員長 小浦久子

#### (7) NPO法人検討委員長 堀口浩司

#### (8) 監査役 丸茂弘幸

注:このニュース発行時には下記のセミナ

ーが既に予定されている。

### 第1回セミナー 2月19日

「USJを活用したテーマパーク型大阪型まちづくりの可能性」

(北野幹夫氏 USJ職員(大阪市出向))

### 第2回セミナー 3月13日

「アジアの大都市における都市デザインの状況」

(呂斌氏(ルビン 北京大学))

(グナワン ツジャジョヨ氏(インドネシア大学))

ブロック活動の詳細については、

<http://www.gakugei-pub.jp/judi/index.htm>をご参照下さい。

## 事務局より

### 1. 新会員の紹介

2002年11月1日～12月31日は下記の通りです。

(入会順、敬称略)

12月31日現在の会員数は、489名です。

正会員氏名	勤務先 (ブロック)
杉浦 榮	S2 Landscape Design and Planning (関西)

学生会員	学校名 (ブロック)
山田 郁子	日本大学理工学部土木工学科(関東)

### 2. 退会者 (2002年11月～12月)

秋本徹、浜崎裕子 (敬称略)

### 3. 住所変更等 (敬称略)

氏名	変更内容(新)
今井 晴彦	株サンプランナーズ 〒153-0042 東京都目黒区青葉台1-19-14北英ビル4F Tel. &Fax. 03-3461-2818
脇坂 和彦	(株) サンポール 東京デザイン室 〒105-0003 東京都港区西新橋1-22-10 Tel. 03-3591-8501 Fax 03-3591-8506

## 編集後記

JUDI沖縄、いや琉球ブロック立ち上げができると期待しながら、編集作業を行った。

石嶺(ネー)氏の原稿の遅れをいいことに、私もまとめが遅れました。昼間の座談会から古酒を飲みながらの懇親会は迫力がありました。那覇の中心市街地はご多分にもれず、疲弊していました。

あの市場周辺のアーケードはノスタルジックで、ゆっくり取材したいなーと、今度は、JUDI琉球ブロック設立式に皆さんに会える日を楽しみに。(櫻井淳)

今回は、これまで一度も取り上げられなかった沖縄を「観光」を切り口に取り上げた。編集委員である私たち自身が、自らの足を使って見たいものを見、知りたいことを聞き、それを記事にしたのである。現地での意見交換会で、「本土の人は沖縄を遠く離れた場所と考え、沖縄本島の人は八重山を、八重山の人はそのまた離島を遠く感じている。相互のそして全ての距離感の落差を埋めることから始める必要がある。」と語った参加者の言葉が心に残った。(近田玲子)

金武町で「シャコーガイを見に行きましたよ」と誘われた時は海の近くなのでシャコ貝を肴に古酒でも飲めるのかと思った。後でシャコ貝ではなく社交街だと分かったが、キャンプ・ハンセンの前に広がる社交街は米軍の利用が減ったせいか少し寂れていたが、独特の雰囲気を持っていた。

かつて沖縄は魅力的な独自の色彩を豊富に持っていたが、戦争とその後の基地や観光によってその色合いを薄めてしまった。今回の沖縄の取材では、観光客もまちを育てる意識が必要な時代になったのではないかと感じた。まず、JUDI琉球ブロックの立ち上げを支援したい。(吉田慎悟)

### 広報・出版委員会

澤木俊司	石崎均
土田旭	伊藤光造
近田玲子	加茂みどり
菅孝能	河本一行
中嶋猛夫	森川稔
櫻井淳	横山あおい
松村みち子	吉田慎悟
白濱力	作山康